

1 研究概要

(1) 研究主題

すべての子どもに対する支援の質の向上を目指して

～特別支援教育の視点を生かした指導・支援の充実～

(2) 主題設定の理由

各学校においては、近年、通常の学級における教育上特別な支援を要する児童生徒が増加している。このような状況から、通常の学級における発達障がい等のある子ども達への適切な指導・支援の一層の充実を図っていくことが必要である。

教育支援部では、平成27年度～平成29年度までの3年間「子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方」として、はこだて子どもサポートシート（以下、サポートシートと標記）の活用を中心とした研究を進めてきた。その結果、サポートシートの作成や効果的な活用方法、特別支援教育に関する専門性向上のために、より効果的な実態把握のポイントや子どもへの具体的な支援方法等について提示することができた。しかし、サポートシートを活用した具体的な実践や検証までには至らなかった。また、学級集団の中で個別に支援を行うことへの限界や難しさ、校内支援委員会を中心とした計画的・継続的な支援体制等に関する課題も挙げられた。

平成30年度函館市学校教育推進の指針「アプローチ」には、視点Ⅰ「授業を核とした指導の充実」の中で、特別支援教育の視点から「一人ひとりが活躍できる授業への転換」を、また、視点Ⅱ「授業を支える取組の充実」の中では、特別支援教育の視点から「子ども一人ひとりに対する支援の質の向上」に取り組むことを示している。

また、文部科学省「インクルーシブ教育システム構築事業」（2014）では、共生社会実現にむけての教育分野における重要課題を、特別支援教育に加え、「障害のある者と障害のない者が可能な限り共に学ぶ仕組みを構築すること」とし、これを「インクルーシブ教育システム」としている。こうした動向を背景とし、通常の学級で、障がいの有無にかかわらず全ての子どもの学習参加を保障する教育実践として、学校における「ユニバーサルデザイン」の活用が注目されている。これは、特別支援教育が培ってきた指導・支援の方法や視点を積極的に取り入れることにより、すべての子どもにとって効果的な支援を行うことができるのではないかと考えられているものである。

これらの成果と課題や特別支援教育に関する動向を踏まえ、今年度の教育支援部では、すべての子どもに対する支援の質の向上を目指した、特別支援教育の視点を生かした指導・支援のあり方について、学校におけるユニバーサルデザインの効果的な活用を中心とした研究を深めていきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究目的

すべての子どもが安心して学校生活を送り、わかる喜びや学ぶ意義を実感できるようにすることを目指した指導・支援の在り方を明らかにすることにより、各学校の特別支援教育の推進の充実に資する。

(4) 研究仮説

【仮説1】ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の充実を図ることにより、すべての子どもが学ぶ意義や喜びを実感することができるであろう。

【仮説2】校内支援体制が充実したり、小・中連携が機能したりすることにより、一貫した支援の充実が図られ、すべての子どもに対する支援の質の向上につながるであろう。

(5) 研究内容

【研究内容1】授業を核とした指導の充実

- ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践
 - ・ 先行実践を収集し分析するとともに，研究の推進に積極的に取り入れる。
 - ・ 授業実践を行い，効果的な指導・支援の在り方について検証と改善を重ねる。
- サポートシートを活用した実践
 - ・ 学校生活や授業等で具体的な実践を行い，検証と改善を重ねる。
 - ・ 実践記録の振り返りを通して成果や課題を明らかにする。

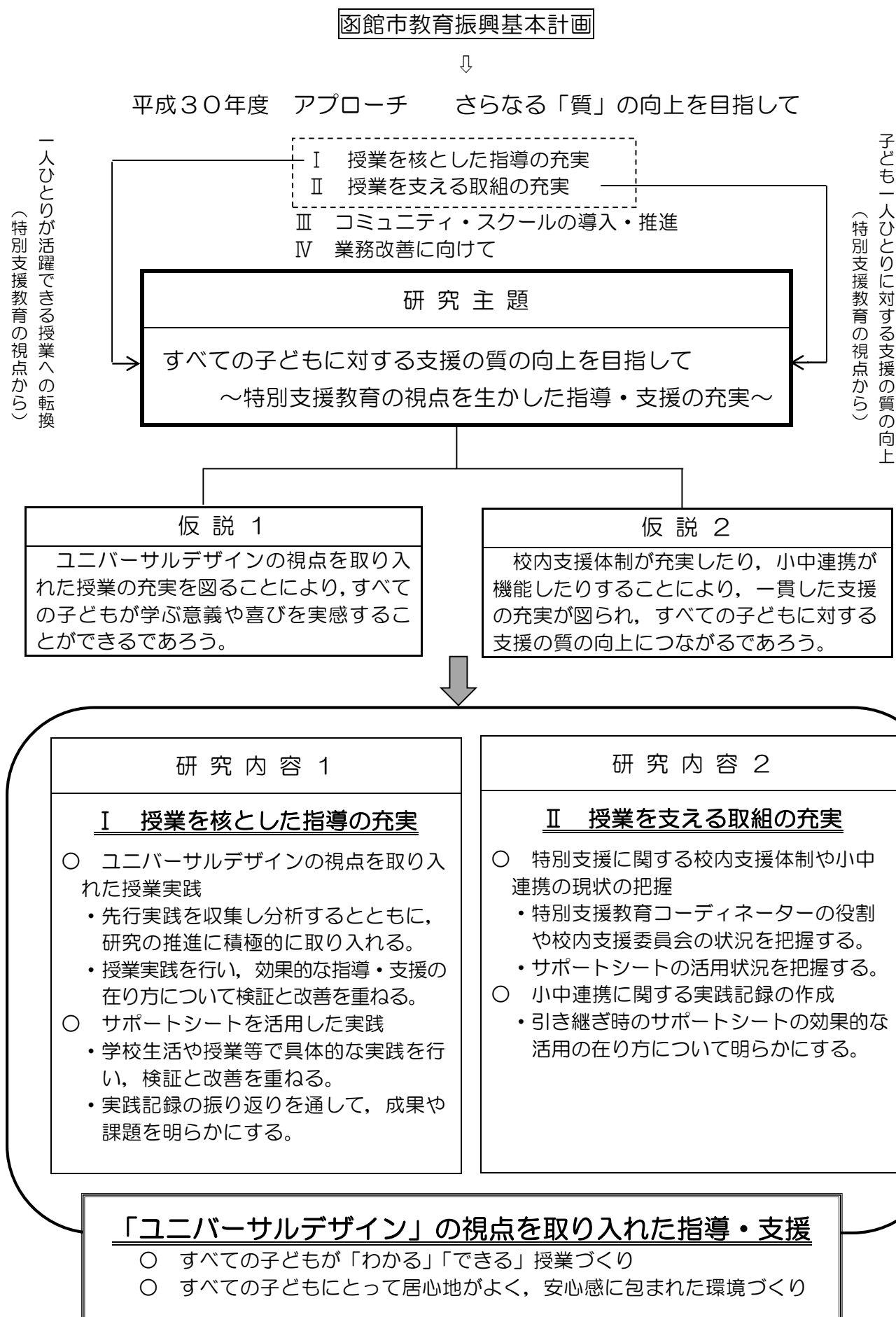
【研究内容2】授業を支える取組の充実

- 特別支援に関する校内支援体制や小中連携の現状の把握
 - ・ 特別支援教育コーディネーターの役割や，校内支援委員会の状況を把握する。
 - ・ サポートシートの活用状況を把握する。
- 小中連携に関する実践記録の作成
 - ・ 引き継ぎ時のサポートシートの効果的な活用の在り方について明らかにする。

(6) 研究計画（3年計画）

平成30年度	平成31年度	平成32年度
学校における「ユニバーサルデザイン」の効果的な活用を目指した取組		
【情報収集・分析】 ・ユニバーサルデザインの視 点を取り入れた実践例 ・特別支援に関する校内支援体 制や小中連携の現状把握	【分析・実践・検討】 ・ユニバーサルデザインの視 点を取り入れた授業づくり ・ユニバーサルデザインをも とにしたサポートシートの 活用 ・特別支援教育に関する校内 体制の実践例の紹介 ・サポートシートを活用した 小中連携の実践	【実践・検証・改善】 ・サポートシートを活用した 小中連携の実践例の紹介 【研究のまとめ】 【次年度の研究の方向性】

(7) 研究構想図



2 ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践について（研究内容1）

（1）ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業とは

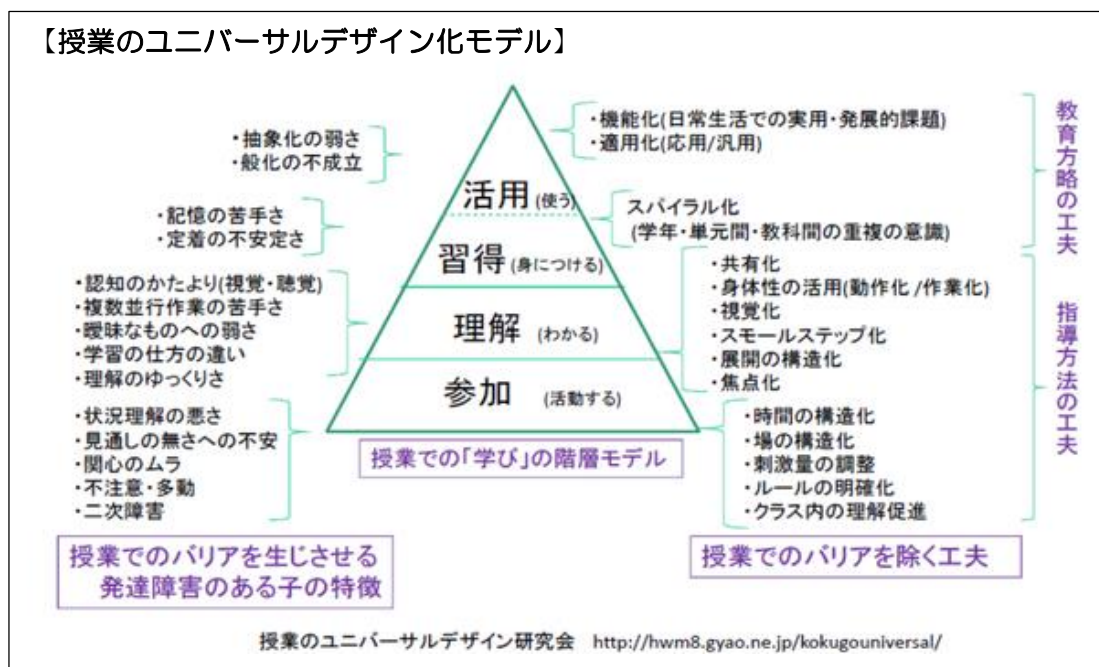
今年度の教育支援部では、すべての児童生徒がわかる喜びや学ぶ意義を実感できる授業をするために、「ユニバーサルデザイン」の視点を取り入れた授業づくりについて研究を進めてきた。

教育支援部としては、「授業のユニバーサルデザイン」を、以下のように定義している。

学力の優越や発達障がいの有無にかかわらず、すべての子どもが、楽しく「わかる」「できる」ように工夫・配慮された、通常の学級における授業のデザイン

つまり、これまでの授業では参加できなかったり、理解しにくかったりした子どもたちが、進んで参加したり理解しやすくなったりするような授業を実現するとともに、すべての子どもたちにとって参加したり理解したりしやすくなるように授業を設計することと捉える。

では、具体的にどのように授業をデザインすればよいか検討した際に、明星大学の小貫悟氏がまとめた「授業のユニバーサルデザイン化モデル」を参考に研究を進めていくこととした。（下図）



中央の三角形には、授業の四つの階層、「参加」「理解」「習得」「活用」が位置付けられている。最も土台となっているのは、子どもの「参加」である。ただし、授業にただ参加するだけでなく、「理解」させることが重要である。さらに、理解したものを確実に定着させる必要があることから、「習得」「活用」の階層へ導くことが重要となる。

三角形の図の左側は、発達障がいのある子どもの特徴となっているが、定型発達の子どものにも、個人差として表出するものであることから、すべての子どもに当てはまる可能性がある困り感だとも言える。一方で右側は、左側の特徴を授業内でカバーするための14の視点である。これらの視点は、発達障がいのある子どもだけでなく、どの子どもにとっても、便利で効果的な支援になり得ることから、全ての子どもの参加・理解・習得・活用のしやすさにつながる、ユニバーサルデザインの視点と言える。

また、各視点は、下部に置かれたものであればあるほど、上部の視点を支える要素となる。

以下に、14のユニバーサルデザインの視点を順に説明する。

【クラス内の理解促進】

失敗を許さない雰囲気では学び合いは成立しない。互いのよさの理解を促す働きかけが必要である。

【ルールの明確化】

発表する時、聞く時など授業に参加するためのルールを決めておくと、子どもは安心して授業に参加できる。

【刺激量の調整】

教室内の掲示物や音などが、授業への集中を妨げることがある。授業中の妨害刺激を確認しておくことが必要である。

【場の構造化】

教室には様々なものがある。それらが、決まった場所に機能的に置かれていることが必要である。

【時間の構造化】

予定を「見える化」する。見通しがあると、どの子どもも行動をコントロールしやすくなる。

【焦点化】

授業が複雑だと付いていけない子どもが増える。あれこれ欲張らずに授業の内容を絞り込み、学習活動もシンプルにすることが大切である。

【展開の構造化】

単元の展開、授業の展開を明確にし、理論的にある程度パターン化することが大切である。

【スモールステップ化】

授業の目標達成に向けて、学習活動や発問を細かくすることで、どの子どもも授業の中心場面に参加するのに必要な知識などを得ることができる。

【視覚化】

効果的に視覚的情報を使うことで、具体的に理解することが可能になる。

【身体性の活用】

言葉だけのやり取りではなく、動作化・作業化を取り入れることで、理解が一層深まる。

【共有化】

互いの考えを伝え合ったり確認し合ったりすることで、理解が進んでいる子にとっては自分の考えを深める機会となり、困っている子どもにとっては自分の意見の不足分を補う機会となる。

【スパイラル化】

既習の学習内容を繰り返し復習することで、習得の深まりが得られる。

【適用化】

習得したことを別の学習や事象に転用させることで応用が利くようになる。

【機能化】

授業で学んだことを実用的に使えるようにする。

「授業のユニバーサルデザイン化モデル」を活用するにあたり、留意しておきたいことがある。それは、授業をユニバーサルデザイン化する目的は、すべての子どもが楽しく「わかる」「できる」ようにすることであり、共有化、視覚化などはあくまでもそのための手段である。これらのことを忘れ、授業をユニバーサルデザイン化すること自体を目的にすると、しばしば必要のない視覚化、教科の本質とは無関係な焦点化、必然性のない共有化などが行われることになるので、注意したい。

また、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」をするためには、主に「授業の構成」「発問や指示」「板書、ノートやファイル」「教材・教具」についても考えていく必要がある。

以下に、具体的な観点をいくつか例示する。

「授業の構成」について

- ・見通しをもって取り組むこと
- ・学習用具の準備をしていること
- ・導入で、興味・関心を高め動機付けを図ること

- ・主体的に取り組むことができるような課題設定を行い，自力解決のための思考をすること
- ・展開で，主体的な学びを保障するための学習活動の時間配分をすること
- ・ねらいに応じて様々な学習形態を工夫すること
- ・集中力を高めたり気分を切り替えたりする活動を取り入れること
- ・まとめでは「わかった」「できた」という達成感を実感できる活動をする

「発問や指示」について

- ・わかりやすい言葉で発問や指示をすること
- ・興味を引く工夫をすること
- ・全体への指示や発問，個別の声掛けなど支援の仕方を工夫すること
- ・児童生徒の頑張りを認め，肯定的な表現で話しかけること

「板書，ノートやファイル」について

- ・板書の構成を工夫すること
- ・教室の後ろの児童生徒からも見えるような文字の大きさや行間にしていること
- ・大事なところがわかるように工夫して示していること
- ・ノートの取り方やファイルの整理の仕方を工夫していること

「教材・教具」について

- ・写真や絵，動画，視聴覚機器などで掲示する内容をわかりやすくすること
- ・児童生徒の発達の段階に応じて，材料・道具・用具等を準備して活用すること
- ・プリント類は，読みやすく書きやすく工夫すること
- ・基礎や応用，発展など，児童生徒の実態に合わせた対応ができるような教材を準備すること

「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」をより効果的にするために，ユニバーサルデザインで言われている，上記4つの観点を踏まえ，すべての児童生徒がわかる喜びや学ぶ意義を味わうことができるよう考えていく必要がある。

(2) 授業をユニバーサルデザイン化するための「3つのポイント」

日本授業UD学会では、「特別支援教育の考え方を生かし、気になる子が楽しく『わかる・できる』ことを本気で考えて授業をつくることは、その子だけでなく、全員が楽しく『わかる・できる』ことに通じる授業のユニバーサルデザインになる」との考えを示している。そして、理事長の桂聖先生は、どの児童生徒も楽しくわかる・できるための切り口として、既に表示した14のユニバーサルデザインの視点のうち、次の3つを、「ユニバーサルデザイン化の3つのポイント」として挙げている。

ユニバーサルデザイン化の3つのポイント

視点	内容
焦点化	授業のねらいや活動を絞ること
視覚化	視覚的な手掛かりを効果的に活用すること
共有化	話し合い活動を組織化すること

次に、広島県立教育センターで作成された、「『主体的な学び』を促すユニバーサルデザインの授業モデル」をもとに、「ユニバーサルデザイン化の3つのポイント」が具体的に、どのような場面で生かされるべきであるのか、ということについて整理する。

ユニバーサルデザインの授業モデル

過程	ユニバーサルデザイン		解説
	項目	思考を支える指導・支援	
授業前	学級内の理解促進	互いの理解を促進し、安心して活動できる雰囲気をつくる。	ペアによる話し合い活動など「学習形態の工夫」を行うためには、児童生徒が互いの理解を促進し、安心して活動できる雰囲気が必要である。 また、学習形態を工夫することで、学級内の理解促進を図ることも並行して高めていくことが適切である。
	学習ルールの設定	曖昧なことが苦手でも安心して活動できるように、学習ルールを決めておく。	発表の仕方などの学習ルールを決めておくと、児童生徒は発言しやすい。 また、こだわり等により、曖昧なことが苦手な児童生徒は学習ルールがあると安心して活動できる。
	見やすい・聞きやすい環境の設定	集中して取り組めるように、掲示物、板書、机上および音など、見えるものや聞こえるものを整理する。	掲示物、板書および机上を整理すると、視覚情報の重要な部分が明確になり、児童生徒の注意を向けやすい。 また、「聞く」ことに課題のある児童生徒が、集中して聞くことができるよう、伝える内容を整理することが必要である。
	場の構造化	物の配置などを固定化して整理整頓し、教室を機能化する。	物の配置などを固定化して整理整頓し、教室を機能化すると、児童生徒は指導者の指示がなくても準備等を行いやすくなる。 また、このことは、刺激を調整することにもつながる。
	時間の構造化	単元の流れなどを提示し、今後の見通しをもたせる。	見通しをもつことが苦手な児童生徒は、単元など、今後の流れが分かると落ち着いて活動しやすい。

導入	学習内容の視覚提示 (視覚化)	見せ方を工夫し、本時の学習への意欲を高め、全員が参加できる活動を仕組む。	導入時に、学習内容に関連した興味・関心のあるものや意外性のあるものなどを提示したり、一部を隠して予想させるなどして視覚化したりすることは、児童生徒の注意を喚起しやすい。 また、児童生徒に対して、自分たちで課題を発見させることは、課題解決への意欲につながりやすい。 ＜例＞掲示物の工夫、ICTの活用、板書の工夫
	本時の流れの確認・めあての提示 (焦点化)	活動内容、活動の流れ、活動目標、解決すべきことを身近な生活に結び付け、イメージさせる。	活動内容、活動の流れ、活動目標、解決すべきことを身近な生活に結び付け、イメージさせる。常に行うパターン化された活動、活動の流れの提示があると、見通しをもって活動しやすくなる。 また、授業で最終的に身に付けさせたい学習内容などを焦点化し、めあてとして提示しておくことは、児童生徒の学習へのイメージ化を図ることにつながる。 ＜例＞資料提示の工夫、説明・指示の工夫
展開	モデルやヒントの提示 (視覚化・共有化)	やり方等の理解をそろえ、解決できるイメージをもたせる。	活動開始時にやり方等が分からない状態が、一定時間続くと、児童生徒は意欲を失いやすい。 モデルやヒントで視覚化し、友だちと共有化させ、やり方等の理解をそろえて、解決できるイメージをもたせると、活動しやすくなる。 ＜例＞交流場面の工夫、発問・説明・まとめ方の工夫
	観点や視点の提示 (視覚化・焦点化)	教材・教具の示し方を工夫し、観点や視点に気付かせ、考える内容を方向付ける。	観点や視点を示すことで、考えたり話し合ったりしやすくなる。 教材・教具の示し方を工夫して視覚化し、観点や視点に気付かせ、方向付けると、児童生徒の取組課題が焦点化され、児童生徒は考えやすくなる。
	動作化・作業化	身体を使わせることで、表現に気付かせたり理解を深めさせたりする。	身体を使わせることで、表現に気付かせたり理解を深めさせたりしやすくなる。 相手の気持ちや状況を理解しにくかったり、「聞く」ことだけではイメージしにくかったりする児童生徒が実感しやすくなる。
	学習形態の工夫 (共有化)	ペアやグループによる話し合い活動等で、言語化させ合い、理解を深めさせる。	ペアやグループによる話し合い活動等では、児童生徒は積極的に意見を述べやすい。観点や視点の提示があると、なお、活発に活動しやすい。 言語化して思考を整理し共有することで学習を深められる。また、衝動性のある児童生徒が、一旦、意見を述べることで思考を整理しやすくなる。 ただし、「学級内の理解促進」を併せて取り組む必要がある。
終末	振り返りでの言語化 (視覚化・共有化)	めあてに対し、発言させたり書かせたりして振り返らせることで、できたことを実感させる。	授業の始めに提示した「めあて」に対し、発言させたり書かせたりして振り返らせ、視覚化・共有化すると、児童生徒は、学習したことが明確になりやすい。このことは、児童生徒にできたことを実感させやすい。
授業後	既習事項の掲示 (視覚化)	既習事項を想起・活用させ、本単元のみならず他教科等においても活用させる。	既習事項を掲示するなど、視覚化することで、前回の学習内容を想起・活用させやすい。このことは、本単元のみならず、他教科等においても活用させることができる。

(3) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践

今年度、教育支援部では、「ユニバーサルデザイン化の3つのポイント」を取り入れた授業の実践を行い、検証を行った。

＜教育支援部「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践」指導案＞

- 1 単元名 暮らしの中の政治「災害からわたしたちを守る政治」
- 2 ねらい 災害が起きた時、市町村・県・国や様々な機関が協力しながら支援を行ったことを理解することができるようにする。
- 3 展開

	児童の学習活動	教師のかかわり	ユニバーサルデザイン化 するために用いた視点
導入	○ 前時を想起する。 ・東日本大震災では、津波で多くの人が亡くなった。 ・自衛隊の人が救助を行った。 ・胆振東部地震の話題にも触れる。 ○ 学習課題を確認する。	○ 胆振東部地震の写真を見せ、被害の様子から人々の生活の変化に目を向けさせる。	視覚化① 焦点化①
災害が起きた時、被災地を支援する政治のしくみを考えよう。			
展開	○ だれがどのような支援をしたか考える。 (一人⇒ペア⇒全体) ・町 ・道 ・他の市町村 ・自衛隊 ・消防 ・警察 ・ボランティア ○ 町や道、国や様々な機関が被災地を支援する政治の仕組みを考える。 (班)・・・社会リーダーが話し合いを進める。 ○ 何のために各機関がつながっているのか考える。	○ 救助・食料・医療・費用・対応・住む所などのキーワードで視点を整理させる。 ○ 災害対策本部での対応写真を掲示し、市町村の役割を考えさせる。 ○ ホワイトボードと付箋を活用し、班の全員で考えを共有できるようにする。 ○ 何のためにだけではなく、誰のために各機関がつながっているのか考えさせる。	共有化① 共有化② 視覚化② 焦点化②
終末	○ 本時の授業でわかったことを書く。 ○ まとめる。	○ まとめにつながるような児童をあてる。	
被災者の命や安全を守るために、市町村や道、国などが協力しながら支援を行った。			

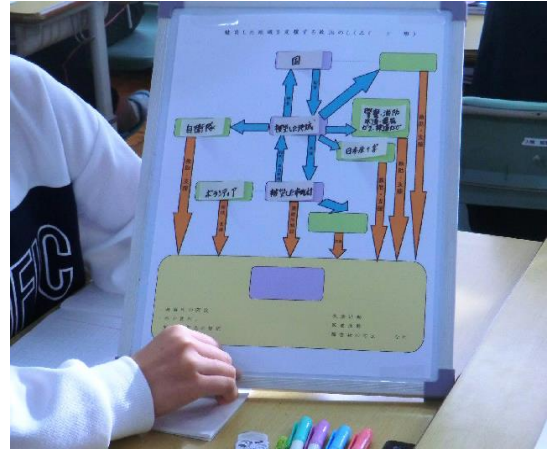
4 評価

- 災害が起きた時、市町村・県・国や様々な機関が協力しながら支援を行ったことを理解することができる。

<本時の授業における「ユニバーサルデザイン化の3つのポイント」>

「視覚化」

効果的に視覚的情報を使うことで、具体的に理解することが可能になる。

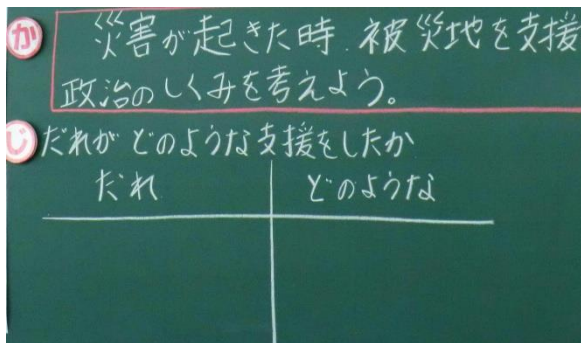


導入部分では、子どもたちが体験した胆振東部地震の新聞記事や写真を使うことで、「だれがどのような支援をしたか」を具体的に考えられるようにした。

また、展開部分では、教科書と同じように色分けした図を大きくすることで、考えを深めることができるようにした。

「焦点化」

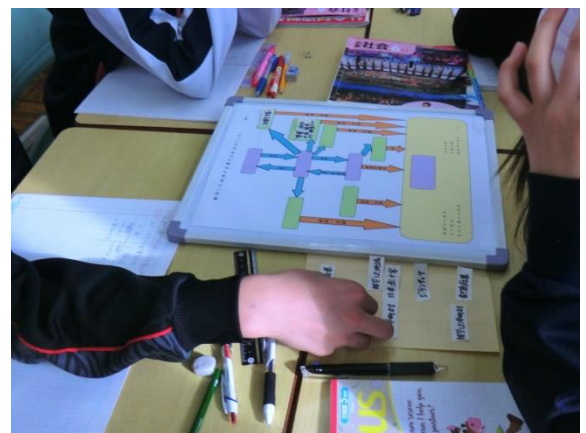
授業のねらいや活動を絞ることで、全員が進んで学習に取り組むことができるようにした。



学習課題を明確にし、何について考えるかをシンプルに提示することで、何を考えるかをわかるようにした。また、救助・医療・住む所などのキーワードで、視点を整理できるようにした。

「共有化」

互いの考えを伝え合ったり確認し合ったりすることで、理解が進んでいる子にとっては自分の考えを深める機会に、困っている子にとっては自分の意見の不十分を補う機会となった。



「一人⇒ペア⇒全体」「班」というように学習形態を工夫することで考えを共有できるようにした。また、付箋を活用することで、みんなで話し合いながら考えられるようにした。

<「ユニバーサルデザイン化の3つのポイント」を取り入れた授業実践の成果と課題>

「視覚化」

- 成果⇒導入において、関連した資料を提示することで、興味・関心を高めることができた。
- 課題⇒写真が見つらい児童がいた。プロジェクターを映す場所や写真を提示する場所を工夫するなど、一時間の学習の軌跡がわかるような板書・環境づくりが必要であった。

【児童の感想】

- ・写真があることで、だれがなにをしているかわかりやすく、理解が深められました。また、どのように、どんな思いで行っているかも伝わってきました。考えやすかったです。復習をする時に写真を見て復習してみたいです。
- ・教科書より、よりくわしく伝わったと思います。
- ・写真があることで、実際にどのくらい大変だったかわかることができた。
- ・言葉だけではわからないものも、写真があることで正解にたどりつくヒントになった。
- ・写真の場面の続きを想像したり、この場面はどこでどんなことをしているか考えたりできた。
- ・写真があることによって理解がしやすかったです。でも遠くから見えにくかったので、紙ではなくパソコンや書画カメラで映して写真を見せていただけると、細かいところまで見えるのでよく理解できたと思います。

「焦点化」

- 成果⇒被災地を支援する政治の仕組みを、グループで図に表す活動では、各機関の関係を矢印とキーワードを活用して整理し示したことで不要な混乱を防ぎ、思考の焦点化を図ることができた。
- 課題⇒班での活動時間をもう少し保証するべきだった。どの活動に重点を置くかを明確にし、時間配分を調整する必要があった。

【児童の感想】

- ・「報告」や「救助」など、たくさんの人々が協力していることがわかった。

「共有化」

- 成果⇒児童同士のやり取りを行わせる場を設定することで、考えを深めたり共有したりすることができた。付箋も、自分なりの考えをもって交流するためには有効であった。

【児童の感想】

- ・みんなで考えたことによって納得させられたり、わかりにくい所もみんなで考えたことによってわかったりして良かった。
- ・班のみんなで考えることで様々な意見が出てきて、色々な考え方があるとわかりました。
- ・班になると話し合ったり聞き合ったりするので一人で考えるより良かったです。私は社会が苦手なので、話を進めてくれる人がいて理解できました。
- ・「これはここじゃない?」「いや〜ちがうでしょ。これはこっちでしょ。」となやむ部分もあったけれど、みんなの意見がまとまるとうれしいし、楽しい。社会リーダーも自ら進んで司会をしたり、女子も積極的に意見を言っていたのでよかった。
- ・付箋はとてもよいと思います。付箋の選択だったらやる気が出るし、考える時間が多くとれるので一石二鳥だと思います。

3 特別支援教育コーディネーターへのアンケート調査による、函館市の特別支援教育の実態把握について（研究内容2）

（1）本アンケートについて

① 目的

本アンケートは函館市の小中学校の特別支援教育について、特別支援教育の推進に関するキーパーソンと考えられる特別支援教育コーディネーター（以下、C₀）の業務の実態やC₀が日常の業務の中で感じていることなどを概括的に明らかにすることで、これからの函館市の特別支援教育の充実に資することを目的とする。

② アンケート回答校の抽出方法について

学校規模、地域性、特別支援学級の有無、指名されているC₀の人数等を考慮して、小学校9校、中学校5校を抽出した。

③ アンケートの回答者および回答方法について

各校のC₀に指名されている方に回答していただいた。複数名が指名されている学校については、代表の方1名に回答していただいた。

回答方法については、教育委員会の指導主事および教育支援部の部員が該当の学校を訪問し、半構造化面接の形式で行った。ただし、教育支援部の部員が在籍する学校については、指導主事の訪問は行わなかった。

④ アンケートの回答時期について

平成30年（2018年）10月～平成31年（2019年）1月

（2）アンケート結果

回答いただいたアンケートの結果を、次の6つの観点に基づいてまとめた。

① 観点1：学校の基本情報（規模、児童生徒数、学級数、C₀の指名数など）の結果

	全校児童生徒数（概数）	通常の学級	特別支援学級	特別支援学級の担当教員数	特別支援学級の在籍者数	C ₀ の指名数
A 小学校	35	4 学級	2 学級:知,情	2	2	2
B 小学校	210	7 学級	2 学級:知,情	2	6	2
C 小学校	215	6 学級	2 学級:知,情	2	6	2
D 小学校	300	11 学級	4 学級:知 1,情 3	無回答	無回答	4
E 小学校	310	12 学級	2 学級:知 1,情 3	2	5	1
F 小学校	330	12 学級	なし			1
G 小学校	370	12 学級	4 学級:知 1,情 3	無回答	無回答	4
H 小学校	400	13 学級	4 学級:知 1,情 2,肢 1	無回答	無回答	3
I 小学校	690	21 学級	なし			4
J 中学校	50	3 学級	1 学級:情	1	2	2
K 中学校	100	3 学級	なし			1
L 中学校	190	6 学級	2 学級:知,情	3	6	1
M 中学校	315	9 学級	2 学級:知,情	3	5	1
N 中学校	290	9 学級	5 学級:知 2,情 3	6	28	1

C₀の指名数について、小学校では複数名指名をしている学校が多く見られるのに対して、中学校では1名という学校が多い。指名数が4名のG小学校の場合は、低学年、中学年、高学年を担当するC₀が各1名と、全体担当で専任のC₀を配置している。また、I小学校も指名数が4名であるが、この小学校には特

別支援学級が設置されていないという事情がある。そこで、Ⅰ小学校では、「特別支援教育推進部」という名称の分掌を創設しており、その分掌に所属している教員全員がC₀に指名されている。一方、中学校では、Ⅱ中学校のみが複数名指名であるが、1名は養護教諭であった。このような傾向は、アンケートの回答を得た学校だけではなく、函館市内全体の傾向でもある。

② 観点2：C₀の基本情報（特別支援教育歴、C₀歴、職種、担任の有無など）の結果

	特別支援の 経験年数	C ₀ の経 験年数	複数校で C ₀ を経験	C ₀ の職 種	通常級 担任	通常級 副担任	特別支援 学級担任	所属分掌
A 小学校 1	22	8	2 校	教諭			○	生徒指導
A 小学校 2		1		養護教諭				生徒指導
B 小学校 1	18	5		教諭			○	文化・保体部
B 小学校 2	24	3		教諭			通級担当	文化・保体部
C 小学校	3	3		教諭			○	文化部
D 小学校	16 年以上	2		教諭			○	研究部
E 小学校	5	7	2 校	教諭			○	教務部
F 小学校	1	1		教諭	○			生徒指導
G 小学校 1	21	12	3 校	教諭			○	専任C ₀
G 小学校 2	無回答	無回答	無回答	教諭	○			研究
G 小学校 3	無回答	無回答	無回答	教諭	○			研究
G 小学校 4	無回答	無回答	無回答	教諭			○	生徒指導部
H 小学校 1	7 年以上	7	2 校	教諭			○	教育課程推進部
H 小学校 2	8 年以上	5		教諭			○	教育課程推進部
H 小学校 3	0	2		教諭	○			教育課程推進部
I 小学校	0	2		教諭	○			特別支援教育推進部
J 中学校 1	15	4	2 校	教諭			○	生徒指導部
J 中学校 2		2		養護教諭				生徒指導部
K 中学校	0	3		教諭		○		教務部
L 中学校	7	7		教諭			○	教務部
M 中学校	11	5	2 校	教諭			○	教務部
N 中学校	14	11	2 校	教諭			○	教務部

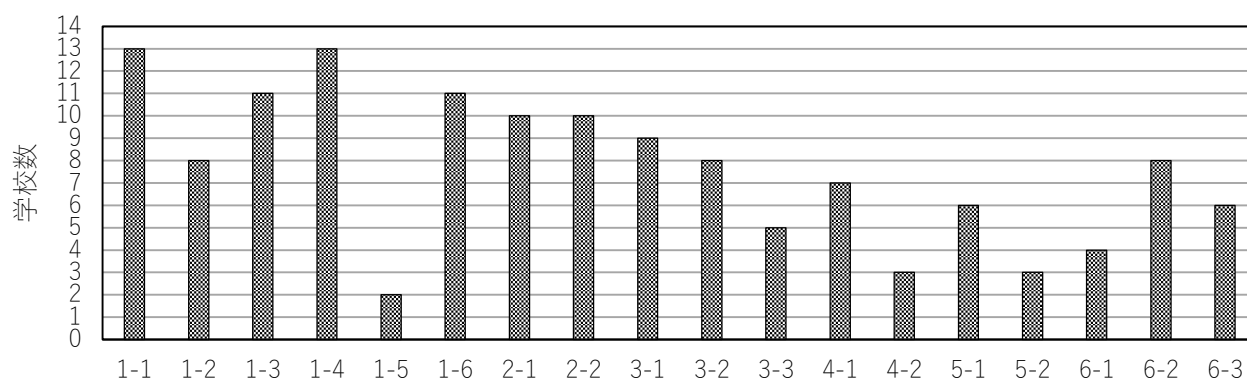
上の表は、C₀が校内でどのような立場で業務を行っているのかを調査した結果であり、アンケートに回答していただいた14校の小中学校で業務を行っている22名のC₀の情報である。

特別支援教育の経験年数は0年（養護教諭など）～24年と、C₀によって大きな幅があることがわかった。C₀の経験年数についても1年～12年と幅があった。また、C₀を2校以上で経験している教員が7名であった。職種では教諭20名、養護教諭2名であった。13名のC₀が特別支援学級の担任、5名のC₀が通常の学級の担任であった。所属分掌については各学校で、いろいろな分掌に所属していた。

上記のような結果から注目すべき点として、C₀と特別支援学級の担任を兼ねている教員が多いこと、C₀を複数名指名している学校があること、人事異動をしてもC₀として活躍している教員がいること、G小学校は専任C₀を設けていること、特別支援学級のないH小学校には、「特別支援教育推進部」という分掌を創設していること、などがある。

③ 観点3：Coによる校内支援の実態（質問項目別）

Coによる校内支援の実態（質問項目別）：質問項目の内容は下記参照



※ 縦軸の「学校数」は、コーディネーターの業務として「実施している」と回答した学校数

1 Coとしての校内支援体制づくりの推進役としての業務

1-1 校内支援委員会の運営や参画（委員会メンバー、開催頻度等）

1-2 特別支援教育にかかわる校内研修の企画と実施

1-3 個別の教育支援計画の作成への参画

1-4 個別の指導計画の作成への参画

1-5 スクールカウンセラーとの連携

1-6 特別支援教育支援員との連携

2 Coとしての学級担任への支援

2-1 担任の相談を基に特別な支援を要する児童生徒の状況を整理・分析（授業観察や検査の実施等）

2-2 担任と共に行う，特別な支援を必要とする児童生徒の理解と支援（指導法や支援法の提示等）

3 Coとしての保護者の相談窓口，保護者に対する啓発

3-1 保護者との共通理解に基づく対応策に提示

3-2 保護者への学校での対応の説明と家庭への支援

3-3 保護者の障害理解と特別支援教育の啓発

4 Coとしての通常の学級の児童生徒に対する理解促進・啓発

4-1 特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習の計画と実施

4-2 ノーマライゼーションについての理解・啓発

5 Coとしての関係機関との連絡調整

5-1 教育関係の関係機関との連絡調整（南北海道教育センター，通級指導教室，特別支援学校等）

5-2 医療，保健，福祉等の外部関係機関との連絡調整

6 Coとしての幼小中高など学校間の引継ぎに関わる業務

6-1 引継ぎの会議等への参画

6-2 前籍校からの引継ぎ文書の整理等

6-3 進学先への情報伝達にかかわること業務

今回のアンケートでは，上記の結果をまとめるにあたって，次のような基準を設定した。

①	10校以上（約71%以上）	現時点において，Coの業務として浸透していると考えられる業務
②	6校以上～9校以下	現時点において，Coの業務として何らかの検討が必要と考えられる業務
③	5校以下（約36%以下）	現時点において，Coの業務として機能するのが難しいと考えられる業務

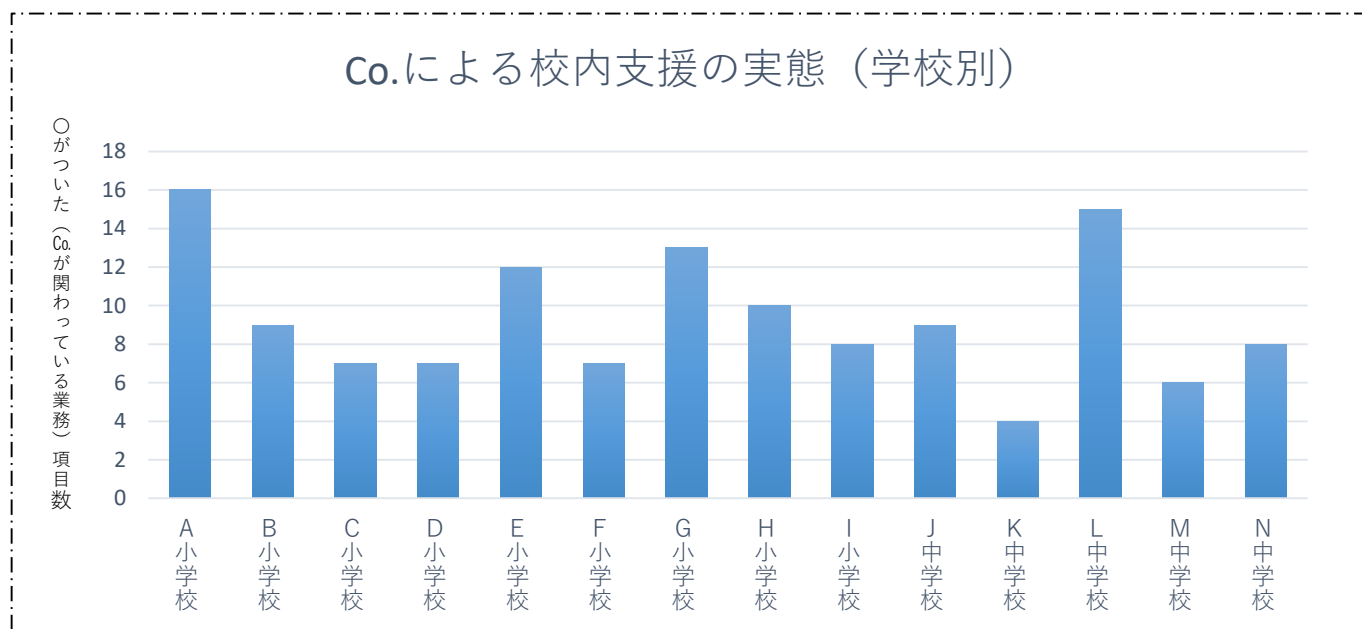
18の質問項目を上記の基準を当てはめてみると，①に該当する質問項目は1-1，1-3，1-4，1-6，2-1，2-2の6つである。②に該当する質問項目は1-2，3-1，3-2，4-1，5-1，6-2，6-3の7つである。③に該当する質問項目は1-5，3-3，4-2，5-2，6-1の5つである。

次にそれぞれの質問項目に対する記述内容についての結果である。①に該当する項目として，1-1（校

内支援委員会）では、メンバーについては多くの学校で管理職、Co、該当児童生徒の担任などが含まれており、ほぼ同様な傾向である。しかし、開催頻度については毎月定期的に行う学校もあれば、必要に応じて開催する学校もあり、ばらつきが見られた。1-3（個別の教育支援計画）と1-4（個別の指導計画）では、書式についての記述があり、学校独自の書式を使っている学校、函館市で作成している「はこだて子どもサポートシート」を活用している学校が見られた。また、通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童生徒の個別の指導計画を作成している学校が数校見られた。2-1、2-2は通常の学級の担任を支援する業務であり、主に児童生徒のアセスメントなどの業務である。この質問項目の記述については、「観察のみを行う」、「心理検査も行う」などの回答が見られた。

次に②、③に該当する項目として、3-1、3-2、3-3は保護者支援に関する項目であるが、教頭および担任が中心であり、Coが関わることはあまりないようである。4-1、4-2は通常の学級の児童生徒への理解促進・啓発に関する項目であるが、学級担任が中心に行っており、Coが関わることはあまりないようである。5-1、5-2は関係機関との連絡調整に関する項目であるが、多くの学校において、教頭が中心に行っており、Coはサポート的な関わりの方である。6-1、6-2、6-3は、幼少中連携に関する項目であるが、学級担任が中心に行っており、Coの関わりはあまり多くないようである。

④ 観点4：Coによる校内支援の実態（学校別）



Co.が関わっている業務数が多かったのは、小規模校のA小学校、L中学校、専任Co.が指名されているG小学校などである。特別支援学級のないF小学校、H小学校、K中学校を比較すると、「特別支援教育推進部」という分掌を設置しているH小学校は、Co.が関わっている業務が多かった。中学校5校について比較すると、L中学校の多さが目立つが、小規模校のJ中学校もCo.が行っている業務が多いと言える。

⑤ 観点5：Coは現在のCo業務量をどのように感じているか。

学校	A小	B小	C小	D小	E小	F小	G小	H小	I小	J中	K中	L中	M中	N中
業務量	4	4	3	無回答	4	4	3	3	3	3	3	3	3	5

※1：小は小学校、中は中学校を表す。

※2：表中の数字は、業務量について5段階評価（5 多すぎる 4 多い 3 ちょうど良い 2 少ない 1 少なすぎる）を行ってもらったときの各校のCo.の評価を表す。

無回答の1校を除くと、その他すべての学校のCo.の評価は3以上であり、Co.の業務量については、「ちょうど良い」から「多すぎる」と感じていることが分かる。その評価を選択した理由については、4や5の評価を選択した理由については「校内において担任業務や分掌業務などの他の業務があり、Co業務を第

一に考えてやっていくのは大変である。」といった内容の記述が多く見られた。3の評価を選択した理由については「校内の先生方の協力や理解があるから」、「特別支援教育推進部4人で協力しながら業務を行っているから」、「専任C0であるから」などの記述が見られた。

⑥ 観点6：C0業務を推進していくためにはどのような能力が必要であると考えるか。

アンケートの記述回答の一覧

- ① 専門的知識，コーディネート力，リーダーシップ。
- ② 専門的な知識があればよいということではない。例えば，特別支援学級の教員（担任）がC0を兼ねるのが最善とは言えない。学校全体の生徒と関わることができるわけではないので，C0業務を進めていくうえで困難もある。
- ③ 先入観をもたずに，いろいろな児童の特徴，特性を捉える力。
- ④ 多くの生徒に関わる中で，子どもの特徴を捉え，的確な支援策を見付け，方向性を考えていく力。
- ⑤ 様々な検査を実施できる力。
- ⑥ C0として，特別支援教育を校内で推進していくために必要な力量は，特別支援教育の専門性を高めるだけでは難しいと感じる。これからのC0には，高い専門性に裏打ちされたリーダーシップや校内の現状を見極める繊細な洞察力などが必要だと感じる。また，こういったいろいろな力量を，一人の教員が身に付けることはとても難しいことなので，校内にC0を数名指名して，分担していくことも必要だと思います。
- ⑦ 最近では，特別支援学級の担任がC0を兼務すること多いと感じるが，この2つは必要とされる力量が重なる部分も多く，そうではない部分（コンサルテーション力，リーダーシップ，コーディネート力等）もあり，そうではない部分の力量を身に付けるのは，ある程度の経験が必要かも知れません。また，そういった力量を知るための研修会なども開催される必要があると感じます。
- ⑧ 研修を積んで，企画力，実践力等を上げる。
- ⑨ 他機関との連携を多くする。
- ⑩ 特別支援教育支援員や学担との情報交流を深める。
- ⑪ 学校の管理職や通常の学級の担任にC0業務や校内での位置付け，特別支援教育に関する理解がもっと広まる（深まる）ことの方が，能力云々よりも，まずは大事ではないかと考えている。
- ⑫ 一般の先生方との特別支援教育に関わる考えのすりあわせを行う必要がある。
- ⑬ 研修などで専門の方から聞いた話をわかりやすく伝える力が必要と考える。
- ⑭ 全体をみる力。
- ⑮ 先生方の困り感，児童の困り感を把握する力とそれに対応する力。
- ⑯ 子どもの実態を見取る力。
- ⑰ 先生方への発信力。
- ⑱ 情報を知るため，外部での研修に参加していきたい。
- ⑲ 特別支援学級での指導内容や特別支援学級に入った時のメリットについて知りたい。
- ⑳ 関係機関の特徴を知っていること。どこに行けば，どのような情報が得られるか。各機関の特色を知っておく必要がある。
- ㉑ 専門性は特別支援学校を経験しないと厳しい。
- ㉒ 他校での実践を知りたい。

上記の記述を整理すると，①，⑥，⑦，⑰などが関係するリーダーシップ，①，⑦，⑨，⑩，⑫，⑳などが関係するコーディネート力，③，④，⑤，⑯などが関係する児童生徒の実態把握のためのアセスメント力の3つの能力が見い出せる。さらに，少数ではあるが，⑦，⑱では研修会の必要性，⑥では学校全体での体制による特別支援教育の推進などの記述も見られた。

(3) 考察

① 観点 1（学校の基本情報）から考えられること

小学校においては、Coの複数名指名、専任Co、分掌の創設などの工夫した取組が見られることから、特別支援教育の推進を重視していると考えられる。

② 観点 2（Coの基本情報）から考えられること

Co業務を続けて2～3校で行っている（人事異動をしてもCoとして指名されている）教員については、特別支援教育の専門性がとても高いのではないかと考えられる。このような教員の存在は、特別支援教育を推進していくうえで、とても心強いと言える。一部の教員に対して業務を特化していくことが必ずしも正しい方向性であるとは言えないが、今後も特別支援教育の専門性が高い人材をしっかりと育成していくための方策を考えていく必要がある。

③ 観点 3（校内支援の実態：項目別）から考えられること

Co業務については、学校ごとに業務内容が異なるということが明らかとなった。この理由としては、Coの力量に左右されていること、Coの業務内容が明確に決まっていないこと、などが考えられる。そこで、例えば、函館市の小中学校におけるCo業務のガイドラインのようなものを作成し、業務内容を明確にすることも一つの方法であると考えられる。

④ 観点 4（校内支援の実態：学校別）から考えられること

小規模校、専任Coを配置している学校、「特別支援教育推進部」という分掌を創設している学校において、Coが関わっている業務が多かった。これは、特別支援教育が充実している学校と考えられる。このようなことから、学校規模にあったCoの適正数の配置や学校事情に応じた特別支援教育の推進体制を整備していくことなどが必要であると考えられる。

⑤ 観点 2（Coの基本情報）、観点 5（業務量）、観点 6などを総合的にみて考えられること

Coは特別支援教育の専門性が必要とされる業務であるので、特別支援学級の担任が指名される場合が多い。しかし、業務量が過重な負担になっていると考えられることや、リーダーシップ等の専門性以外の能力も必要とされることなどもあるので、そこを補うための方策が必要と考えられる。例えば、Coの複数名指名、研修の機会の確保などが必要であろう。小学校に見られるCoの複数名指名、分掌の創設、専任Coなどは優れた取組の一つと言える。

4 研究の成果と課題

【研究内容1】授業を核とした指導の充実

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践や、はこだて子どもサポートシートを活用した実践について

○ 成果

- ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりや学習環境等に関わる多くの先行実践資料を入手し、情報共有しながら、研究の方向性について共通理解を図ることができた。
- ・研究1年目であったが、「ユニバーサルデザイン化の3つのポイント」を取り入れた授業実践を行うことができた。
- ・授業実践にあたっては、「視覚化」「焦点化」「共有化」の3つを中心とし、どれがあてはまるのかを考えながら、授業づくりの話し合いをすることができた。また、授業実践を通して、あらためて「視覚化」「焦点化」「共有化」の重要性を確認することができただけでなく、その手立てが有効であるか、さらに工夫できる点はないかということも検討することができた。

● 課題

- ・今年度はポイントを3つに絞ってユニバーサルデザインの授業実践を行ったが、今後、ユニバーサルデザインの研究をより一層深めていくには「視覚化」「焦点化」「共有化」以外にも大切なポイントがあり得るので、今後もさらに研究を深める必要がある。
- ・多くの先行実践の資料の中から、有効である手立てをまとめて整理できれば、より研究が効率的・効果的に進められたと考える。理論→実践→分析のサイクルで検証・改善を重ねることで、学級経営や授業づくりにおける、より効果的な手立てを考えられたのではないかと考える。
- ・「はこだて子どもサポートシート」を活用した取組と授業実践をリンクさせた研究を検討・推進する必要がある。

【研究内容2】授業を支える取組の充実

特別支援に関する校内支援体制や小・中連携の現状の把握について

○ 成果

- ・Coへのアンケートを実施したことで、函館市の特別支援教育の推進状況に関する、学校現場の現状を概括的に把握することができた。
- ・実際に各学校を訪問し、Coから直接話を聞いたことで、各学校での特別支援教育に関わる多くの実践例を知ることができた。また、各学校の工夫や悩みなどについても具体的な情報を得ることができた。
- ・面談形式でのアンケートにより、単にアンケート用紙に書いてもらうだけでは伝わりにくい部分についても知ることができた。参考になることがたくさんあったので、今後は、他の学校に発信していくことが大切だと考える。
- ・特別支援教育の先進的な取組を行っている小学校が多いことが分かり、今後の特別支援教育の推進に希望を感じた。
- ・特別支援教育が機能している学校は、Coの複数名配置、専任Coの指名、「特別支援教育部」といった分掌の創設のように、限られた人的資源の中でも工夫した取組を行っていることが明らかになった。また、本研究を推進していく中で、今回のアンケートにご協力いただいた学校以外に、特別支援教育について優れた取組を行っている学校があることも把握することができた。

● 課題

- ・今回のアンケート調査をするにあたり、「はこだて子どもサポートシート」の活用による小・中連携の推進状況を明らかにすることも調査対象の一つであったが、今回の調査の範囲では、「はこだて子どもサポートシート」が引き継ぎ等に活用されているケースは確認できなかった。このことは、函館市内の教育上特別な配慮を要する児童生徒を一貫して支援していくためには、とて

も重要な視点となるので、今後の本市の課題の一つになると考える。

- アンケートで得られた成果をより多くの学校に、広く伝えるためにはどうしたらよいか検討する必要がある。
- 学校間で、特別支援教育に関する校内支援体制づくりに温度差があるのではないかと感じた。もし、差があるとすれば、その差をできるだけ小さくするために何ができるのか、検討する必要がある。

5 次年度の展望

【研究内容1】授業を核とした指導の充実

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践や、はこだて子どもサポートシートを活用した実践について

- 今年度は、ユニバーサルデザインの「授業づくり」に焦点をあて、授業実践を行い、手立てに対する成果や課題を得ることができた。次年度以降は、今年度取り組んだ授業づくりについて、さらに有効な視点や手立て等について研究を深めていきたい。また、授業を支える土台として欠かすことのできない「学級集団づくり」「教室・学習環境づくり」等についても、有効な手立てをまとめていければと考える。
- 今年度は、はこだて子どもサポートシートを活用した授業実践にまでは至らなかった。次年度以降は、「基礎的環境整備」の一つでもある、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導と、「合理的配慮」の提供と深く関わる、はこだて子どもサポートシートの活用による指導と両輪とした研究を進める必要がある。

【研究内容2】授業を支える取組の充実

特別支援に関する校内支援体制や小・中連携の現状の把握について

- アンケート調査を通して、例えば校内で通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童への個別の指導体制を整備している小学校などの事例を知ることができた。このような学校を特別支援教育の先進校と捉えて、次年度以降、先進校の取組を具体的に調査し、函館市内の学校に広めるという取組を行っていききたいと考える。
- 特別支援教育に関わる校内支援体制の充実のために、C₀の果たす役割は非常に大きいと考える。しかしC₀の業務については、学校ごとに業務内容が異なるということが明らかとなった。この理由としては、C₀の業務内容が明確に決まっていない等の理由により、C₀の個々の専門性に左右されてしまう部分もあるのではないかとと思われる。そこで、函館市の小中学校における、C₀の業務のガイドラインのようなものを試案・作成することを検討していきたい。業務内容を明確にすることで、C₀経験の有無に関わらず、誰でもスムーズに業務を行うことができるのではないかと考える。
- はこだて子どもサポートシートを活用した小・中連携や学校間の引き継ぎの在り方について、今後も検討していく必要がある。

6 資料

函館市の小中学校における特別支援教育コーディネーターの業務にかかわるアンケート

1 目的

函館市内小中学校の特別支援教育の推進状況について、特別支援教育コーディネーター（以下、Co. と略します）の先生方によるアンケートを基に分析し、これからの函館市の特別支援教育の充実に資することを目的とします。

また、本アンケートは、南北海道教育センターの教育支援部の研究（研究主題：「すべての子どもに対する支援の質の向上を目指して～特別支援教育の視点を生かした指導・支援の充実～」）の一部として活用しますが、学校名や氏名等については公表しませんので、ご理解とご協力をお願いいたします。

2 対象者

函館市内小中学校において、Co. として指名されている教員の中から数名程度

3 時期

平成30年（2018年）10月～平成31年（2019年）1月

4 実施方法

学校を訪問し、面接形式（半構造化面接）で実施

学校名：

回答者名：

5 在籍校の基本情報についてご記入ください。

(1) 全校児童生徒数

(2) 学級数（通常級、特別支援学級別にご記入ください。）

【通常の学級】

【特別支援学級】

(3) 特別支援学級の担当教諭数と学級別の在籍児童生徒数

【担当教諭数】

【学級別の在籍児童生徒数】

(5) 小中連携の対象となる学校名をすべてご記入ください。

(6) Co.として指名されている教員数をご記入ください。

6 Co.の基本情報についてご記入ください。

複数名指名されている場合は、それぞれの先生方について個別にご記入ください。

(1) 特別支援教育歴（在籍校からさかのぼる形でご記入ください。）

(2) Co.歴（在籍校からさかのぼる形でご記入ください。）

(3) Co.の先生の在籍校における現状（Co.業務およびそれ以外の業務全般についてご記入ください。）

① 職種：教頭/主幹教諭/教諭/養護教諭

② 通常の学級担任/副担任

③ 特別支援学級担任/副担任

④ 専科

⑤ 所属分掌

⑥ その他

7 Co.としての校内支援の実態について

校内において Co. の業務として行っている仕事内容について、それぞれの項目について、項目前の（ ）内に、行っている場合には○をご記入して、その内容についても空欄にご記入ください。行っていない場合は×を（ ）内にご記入ください。なお、Co. が複数名指名されている場合は、どなたかが行っていれば○をご記入いただき、その具体的な内容もご記入ください。

(1) Co.としての校内支援体制づくりの推進役としての業務

() ① 校内支援委員会の運営や参画 (委員会メンバー, 開催頻度など)

() ② 特別支援教育にかかわる校内研修の企画と実施

() ③ 個別の教育支援計画の作成への参画

() ④ 個別の指導計画の作成への参画

() ⑤ スクールカウンセラーとの連携

() ⑥ 特別支援教育支援員との連携

⑦ 上記以外に校内支援体制づくりの推進役としての業務で行っているものがあればご記入ください。

(2) Co.としての学級担任への支援

() ① 担任の相談を基に、特別な支援を必要とする児童生徒の状況を整理・分析 (授業観察や検査の実施など)

() ② 担任と共に行う、特別な支援を必要とする児童生徒の理解と支援 (指導法や支援法の提示など)

③ その他、学級担任への支援としての業務で行っているものがあればご記入ください。

(3) Co.としての保護者の相談窓口、保護者に対する啓発

() ① 保護者との共通理解に基づく対応策を提示

() ② 保護者への学校での対応の説明と家庭への支援

() ③ 保護者の障がい理解と特別支援教育の啓発

④ その他、保護者との相談、保護者への啓発としての業務で行っているものがあればご記入ください。

(4) Co.としての通常の学級の児童生徒に対する理解促進・啓発

() ① 特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習の計画と実施

() ② ノーマライゼーションについての理解・啓発

③ その他、通常の学級の児童生徒の理解促進・啓発としての業務で行っているものがあればご記入ください。

(5) Co.としての関係機関との連絡調整

() ① 教育関係の関係機関との連絡調整（南北海道教育センター、通級指導教室、特別支援学校等）

() ② 医療、保健、福祉等の外部関係機関との連絡調整

③ その他、関係機関との連絡調整としての業務で行っているものがあればご記入ください。

(6) Co.としての幼小中高など学校間の引継ぎに関わる業務

() ① 引継ぎの会議等への参画

() ② 前籍校からの引継ぎ文書の整理など

() ③ 進学先への情報伝達にかかわることの業務

④ その他、幼小中高など学校間の引継ぎに関わる業務として行っているものがあればご記入ください。

8 校外において、Co.の業務として行っていることはありますか。

【記入例】

- ・函館市サポートチームとして、他校の支援を行っている。
- ・近隣校の児童生徒及び特別支援学級等へのサポート etc.

9 次の質問項目については、Co. 業務についてのあなたの主観的な判断でお答えください。

(1) あなたの在籍校における全業務における Co. としての業務量についてはどのように感じています。
次の中から最も近いと思われるところに○を付けてください。また、理由をご記入ください。

多すぎる 多い ちょうど良い 少ない 少なすぎる

【それを選んだ理由】

(2) 今後、あなたが Co. 業務を推進していくためにはどのような資質・能力の向上が必要であると考えていますか。思い付く限りご記入ください。

大変お忙しい中、アンケートの回答にご協力いただきまして、誠にありがとうございました。みなさん
からご回答いただきましたアンケートの結果については、函館市の特別支援教育の充実に役立ててまいり
ます。また、南北海道教育センターの研究にも活用させていただきます。また、ご回答いただいた皆様には、
集約結果等を今年度中にお知らせする予定です。

なお、本アンケートにかかわるお問い合わせやご意見等については、以下の連絡先へお願いいたします。

南北海道教育センター 教育支援部 研究担当 TEL/FAX : Email :

<参考文献・資料>

- ・授業のUD（ユニバーサルデザイン）の視点を取り入れた授業作りについて
（青森県総合学校教育センター 平成29年）
- ・東京都特別支援教育研修テキスト（東京都 平成29年）
- ・「通常の学級における特別支援教育の考え方に基づいた授業づくりの研究
―「主体的な学び」を促すユニバーサルデザインの授業モデルの開発を通して―」
（広島県立教育センター 平成28年）
- ・小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン（教育出版 平成28年）
- ・すべての子どもが「分かる」「できる」授業作りガイドブック
～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、
すべての子どもにあると有効な支援～
（高知県教育委員会 平成25年）
- ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり（山形県教育センター 平成25年）
- ・共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）（文部科学省初等中等教育分科会 平成24年7月）
- ・国立特別支援教育総合研究所 研究資料 特別支援教育コーディネーターの役割・機能について
（国立特別支援教育総合研究所 平成19年）

〔研究担当者〕

【教育支援部：平成30年度研究員】

高 谷 亜 姫（函館市立中央小学校教諭） 北 村 明 子（函館市立中の沢小学校教諭）
大河原 美 穂（函館市立北昭和小学校教諭） 川 村 珠 実（函館市立北日吉小学校教諭）
高 橋 晋 司（函館市立戸倉中学校教諭）

【指導主事】

佐 藤 大 輔
酒 井 光 史
辰 巳 哲 治
小 林 郁
中 村 健太郎